

特116

988

報

巴里・レクチニール・プール・トゥス誌所載

言論界の霸王

ノースクリフ卿の來朝



世界思潮研究会版



始



言論界の霸王

譯者 五 里

倫敦タイムズ紙主筆ノースクリフ御來る。時恰も華府會議開催せられんとするにあたり、彼が突然ふる來訪は、果して事を吾人に暗示するものぞ！

去月二十五日、御が日本來遊の途上、香港に於いて語りた所に、**「日英同盟は過去の遺物にして、日英米の三國が太平洋問題を最も自由に解決せんとするを妨ぐる最大の障礙なり」**と云ひ、更に、**「日英同盟の延長は米國と支那とに不快を與へ、英國の亞細亞に於ける威信に何物をも附加せざるべし」**と論じてゐる。

その批判は暫く措き、『言論界の霸王』と呼ばれ、『無冠の帝王』と稱

大正
10 11 5
内交

へられる彼が人物と、その事業と、生活の一斑を紹介するは、
時に取つて、好参考であらう。

大正十年十一月

譯者 しるす

七月十六日の事であつた。倫敦市のウオ
タロー―停車場のプラットホームに、数多
の人が黒山を築いてゐた。その人々の中に
は、軍人、文官、婦人、佛國人、英國人、
米國人、伊太利人、亞米利加人、日本人、
支那人……殆ど全世界の國民を網羅してゐ
た。

「何事が起つたのです？」

と、一人の男が自分に尋ねた。自分は、
有名な新聞マンノースクリップ卿が東洋視

察の途に上る所である旨を告げた。
『何の目的を以て東洋まで行かれるのです』
と、更に其の男は訊いた。で、自分は、彼が
太平洋問題の實地研究の爲と、も一つには
東洋（殊に日本及支那）に於ける經濟状態の視
察の爲である旨を波に教へてやつた。
彼は嚴肅な面に微笑を浮かべながら、見送
りの人々と一々握手を交した後、最後に妻
の唇に暫しの別れの接吻を遺し、後れ馳せ
にかかけつけたタイムズ社長へのンリー・スチ
ード氏と固き握手を交換して、列車内に這

入った。彼は背の高い美しい亞米利加の婦
人記者を一名伴つてゐた。彼女の手には、
小型タイプライターと、早取写真機とが携
へられてゐた。

實に其の出發は王侯の首途かとも思はれ
る程に物々しいものであつた。その如く、
彼は英本國に於いて、タイムズ紙及びデイ
リリー・エール紙の主筆を兼ね、その勢力は
實に偉大なもので、新聞界のナポレオンと
まで謳はれてゐる。従つて、また彼には其
の勢力の反面に於いて、勢からぬ政敵をも有

してゐるが、然しながら、彼は自己の主義主張の前に、政府も宰相もない。一に英國國民の輿論を代表する第一人者であるのである。

少年の頃、彼は海軍々人になる志望であつたのだが、十六才の時、偶然の機會より當時新聞界に人ありと謳はれたゼームス・ヘンダーソン氏に其の將來ある才能を認められ、『青年』なる週刊新聞の一記者となつた。これが、そも／＼彼が一生に於ける登龍門で、その後彼は二十才の時『應答』といふ通俗

の月刊雑誌の編輯記者に轉じ、殆んど凡ての事務を身一つに引受けて、縦横無盡に引き廻し、多大の成功を収めた。その後二年程として、彼は兄の助力を得て『社會速報』なる新聞を創刊し、一年に百二十五万法の金を儲けたのであつた。其の後、テイリー・メイルの叢刊さるゝに及び、其社に入社して、更に活躍を續けて行つた。彼は暫く此處に腰を落付けて、彼が經營する新聞の經濟方面に或る研究を向けた。さうして、その新聞の價格が、當時の一般讀者の生活狀態に

比較して、多少高價に過ぐといふ事實を幾見して、直ちに同紙の定價を改め、一層低廉ならしめた。これに依つて、讀者は頗る増加し、發行部數も十萬を越するに至つたのであつた。その當時の彼の個人生活は、殆んど其の大部分を、公的生活の爲に壓倒せられてゐた。それは彼が其の當時一友人に語つた言葉が立證してゐる。

「自分の此の頃の生活は全く多忙である。自分の身体は全く新聞紙の爲に釘づけにされてゐる。自分は二時間と新聞社を離れる

ことが出来た。』

變轉また變轉、彼は「イザング・ニューズ紙」に在ること須臾にして、更に「ウイクリー・レスパッチ紙」に轉じ、又更に彼の兄と提携して「テイリ・ミロール紙」を經營した。それより名聲頌に上り、「タイムズ紙」の主筆となつた。これは一九〇八年の頃のことであつた。これによつて彼の所論は遍く愛蘭、蘇格蘭の二國に及び、大英國を風靡するに至つたのである。是れ、彼が四十五歳の年である。

其の後彼の幸運は加速度をもつて進展してゆき、『タイムズ出版會社』、『新聞聯盟社』、『新聞合同社』などを創立して、一大勢力を有する新聞王となつた。と同時に又、英國新聞會社を起し、新聞の原料たる製紙の方面にも其の勢力を伸長することを忘れなかつたのである。

この新聞事業によつて、彼は個人としても巨萬の富を築き上げた。彼は更に自動車工業、飛行機事業、電信電話、無線電信の事業にも関係した。そして、その孰れの事

業にも所謂彼の『ノースクリフ軍隊』を出せしめた。因にノースクリフ軍隊といふのは、彼を總司令官として載いてゐる新聞記者及び新聞製作に従事してゐる技術家等の一團が宛かも、一つの軍隊をなしてゐるやうな組織になつてゐたことに名づけた名前である。

彼はタイムズ紙とテイルー・メーブル紙を主宰してゐる頃、英國に於いては前例なき年若さをもつて、男爵を授けられたのであつた。洵に、彼の立身栄達は疾風のものの

であつた。蓋し、それは彼の摸まざる忍耐
努力の賜物であつて、彼は頭の先から足の
爪先きに至るまで、活動の精力を以て固め
られてゐた。
或る時、彼の友人が彼に對して
「君はどうしてそんなに活動が好きなのか
と尋ねたるに答へて彼は
「自分は、活動せんが為めに生れてきたも
のである。自分の歴史は、取りも直さず活
動のレコードである。」
述べてたことがあつた。』
といふ意味のことを

従つて、彼の日常生活は、極めて多忙おも
のである。彼の住居は、ケントにある。其
處は美しい樹木によつて取圍まれ、その大
小の樹幹を透して、青い海が光つて見られ
る。彼は朝は大抵六時には離床する。夏は
五時半に起床する。簡単な朝食を済してか
ら、彼は藤椅子に腰を下ろして、倫敦から
送られた其の朝の各種の新聞に一通り眼を
通す。それより、タイムズ紙、又はライ
プニース紙の編輯部に電話をもつて、それ
身の意見なり、感想なりを報知する。それ

が済むと、今度は數十通に餘る書簡を一々
閱讀する。さうして返事を出す所には、
夕イピストに口述して早速返事を送らせ
また時には、主要なる條件のみを箇條書に
して、之れを秘書の許へ送り、一篇の論文
を起草せしめることもある。最近は、彼自
身ペンを執つて長文の論説を書くといふや
うなことは減多にしない。凡て、口述か代
作か、前に述べた要点書きの綴書きである。
彼は青黒い背廣服を好んで着る。シヤツ
は極めて柔かい上等なものを選び、ネクタ

イは赤地に白の縞のあるものを好んでかけ
る。彼は書斎にあつて、何か物を考へるや
うな場合は、檻に這入った虎のやうに、絶
へず室内を行つたり来たりする。さうして
一旦考が定まると、疾風の速さをもつて、
一気呵成に書き上げる。こゝらが如何にも
彼の事業家らしい面影を見せてゐる。又、
彼は極めて怒り易い性格をもつてゐる。如
何ふる時に怒るかと云へば、怠惰な人にま
つて、欺かれた場合が最も多い。彼が怒つ
た時程物凄なものはない。平生でさへ、勇

猛お面相は鬼の面のやうに赤く赤り、眼は
暗黒の雲の中に廻轉し閃く。唇が弓形に引
延され、肺腑を貫くやうな一言々々が其の
間から漏れ出る。
以前、ノースクリフ卿には休息はあかつ
た。然し、これまでの成功を收め、且つ年
齡も其れに相應して進んだ此頃の彼には、休
息が見出されるやうにあつた。彼自身が大
車輪にあつて働かふくとも、彼の軍隊は立
派に活動を續けることが出来る。彼は一定
の緊張した時間の後には、必ず休息をする

ことを忘れない。休息とは午睡である。彼
は夏からは木立の下でペンチに倚つて、
つすりと寝込む習慣がある。眠覺めてから
の彼の機嫌は頗る斜めだかい。妻君と晚餐
の卓を圍みながら、輕妙な冗談さへ漏れる
ことがある。
また彼は、大抵一週に一度、ゴルフをや
るが、負けず嫌ひの彼は、餘りに其の運動
競技に熱中して、却つて悪い結果を齎すこ
とさへあるといふことである。
敗者褒賞はあれ、ともかく今日まで二十

五年間といふもの、無冠の宰相社會の木鐸
として英國民を指導し警醒し、歴代内閣の
施政を批判して来た彼の手腕は確かに「驚異」
といふ名に値する。彼は狭小なる政黨者流
の如く、自己の意見を二つにするものでは
絶對にない。彼は、企々英國民の声を一身
に代表した男である。彼が最近に於いて、
アスキス内閣を罵倒したのも、一に企々其
の主義からに外ならなかつた。
歐洲大戰の勃發する数ヶ月以前に於いて、
彼は聲を大にして、独逸の態度に對する英

國民の注意を促してゐたが、彼の先見の明
は数ヶ月を出でずして証據立てられた。彼
は戰禍の重大とあるを看取して、大いに國
論の喚起に努め、國內の非主戰論者を盛ん
に攻撃して、政府に向つて、独逸と「宣戰
布告を強要した。
戰爭中に於ける彼の行動及び任務は、新
聞記者として、戰爭の迅速正確なる報道を
怠らざるにあつた。彼は、その間に於いて
屢々巴里に來り、餘りに聯合軍側の戰線が
廣汎に亘り、且つ其の司令官の多き為、多

である。今回の華府會議に於いては、英國
 は既に決定せる日英同盟の爲に、大いなる
 不利を招くものである。日英米の三國が、
 太平洋問題を自由に解決せんと欲せば、先
 づ其の妨害とふる日英同盟を撤廃しなく
 ば、はからぬ。これに及して、日英同盟の延長
 は、米國及び支那に不快を與へ、英國の重
 細亞に於ける威信に何物をも附加し、か
 である。日英同盟は、支那現在の混乱を救
 済する能力が、おののみならず、日米相互の
 利害の調和を破る原因とあるものである。

(完)

150
614

大正十年十月三日印刷
大正十年十月三日發行

(非賣品)

東京市本郷區弓町一ノ二五
野澤源之丞

東京市本郷區弓町一ノ二五
世界思潮研究會

電話小石川一七七一番
振替東京三八四二九

終